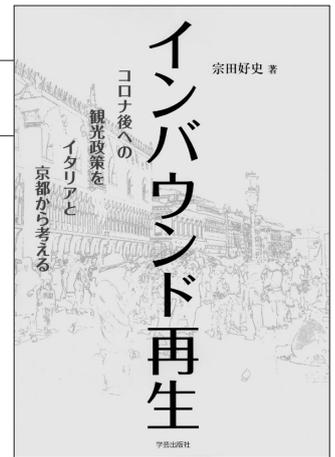


宗田好史=著

インバウンド再生

—コロナ後への観光政策をイタリアと京都から考える—

2020年11月発行
 本体2,400円+税
 学芸出版社
 ISBN 978-4-7615-2750-1



清水哲夫
 SHIMIZU, Tetsuo

東京都立大学大学院都市環境科学研究科観光科学域教授

コロナ禍でインバウンドが突然ゼロリセットになった。インバウンドの旨味を知った政府や業界はその再現に向けた野望を隠さない。一方、コロナ前には、加熱したインバウンドの負の側面、オーバーツーリズムのダメージを受入地域の住民が経験した。希望的憶測に過ぎないが、次の感染症の危機が到来しない限りは、インバウンドはそう遠くない将来にコロナ前に近いトレンドで推移するだろう。そのときに我々が持つべきインバウンド政策の基本的考え方を本書は示そうとしている。

本書は序章を除いて8つの章で構成されている。前半は外国人観光客受け入れの経験が豊富なイタリアの歩んできた道のりと、それが社会経済、文化、まちづくり、ビジネスに及ぼした影響を解説している。戦後のイタリアへの来訪は、西欧を除けば、アメリカ、日本、東欧、中国の国・地域の順で成長し、それぞれの地域の経済状況やローマ・イタリア文化の理解度に依りて、その行動スタイルは異なっている。これら国・地域は、当初は異質なものとして冷ややかに見られていたが、来訪者と地域コミュニティのある種の「歩み寄り」の期間を経て、地域コミュニティが何気ない日常や資源の価値に気が付き、一方で来訪者の欲求に寄り添うことで、それらの本質的価値を保ちながら活用し地域経済や産業の維持・発展に結びつけてきた。まさに、世界の文化都市が持つべき基本的な戦略を先進的に実践してきたと言えるだろう。

一方で、混雑や地域のコンテキストから外れた都市・生活空間の変容など、圧倒的に押し寄せる観光化による弊害にも翻弄され続けてきた歴史でもあった。第4章では、このような観光公害に取り組む政策が紹介されている。交通対策、総量規制、予約制度、創造都市、持続可能といったキーワードが登場するが、それぞれの事例にはうなずけるものの、それぞれが全体の政策体系の中でどのように位置づけられているのか、一

歩踏み込んで説明してもらいたかった感はある。

6章と7章は京都に舞台を移し、近年の動向や政策について紹介している。基本的なストーリーは先のイタリアのものと同じである。近年のインバウンドでは京都文化を愛している外国人が街並み保全や伝統産業活性化の主役となったことなど、京都でもヨソモノが主導する地域資源の高付加価値化がいかに展開される。そして1990年代には、アウトバウンドで目の肥えた都会の女性が単なる古都だった京都の観光資源を変質させている。評者は最大のインバウンド政策はアウトバウンド促進だと常々感じているので、その好事例が京都にあったことは目からウロコであった。

8章は本書のまとめとして、イタリアや京都の経験を踏まえ、コロナ後の地方都市の観光再生の戦略を論じている。提示されている8つの戦略はそれぞれ理にかなっていると感じる。しかし、ここでの「地方都市」がどのようなものをイメージしているのかが本書からは読み取れなかった。ローマ、フィレンツェ、ヴェネチアや京都は世界有数の歴史文化都市で、事例としてはかなり特殊であると言ってよい。これら都市の経験からのレッスンである「地域の歴史や固有の生活文化を現在のコンテキストの中で資源化する」、「資源を分散化させて混雑を分散する」という方向性自体を否定するものではないが、日本の一般的な地方都市の資源力、人材育成の現状を考えると非常に荷が重い。目線を下げてもいいことはない和理解しつつ、もう少し弱い観光地に寄り添った提言も必要だと感じた。

ただ、アジアの国際観光市場はそう遠くない将来に成熟し、徐々に全体のパイは増えない「ゼロサムゲーム」のようになってくだろう。観光客に選ばれるために、他の観光地よりも選択される理由をたくさん持つ必要がある。本書は、やる気のある観光地がそのような市場で勝ち抜くための学びの入門書として最適である。